

自己評価報告書

平成23年 5月 9日現在

機関番号：23803

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20720201

研究課題名 (和文) ビザンツ帝国の教会・修道院改革についての体系的研究

研究課題名 (英文) A Study of Ecclesiastical and Monastic Reform in Byzantium

研究代表者

橋川 裕之 (HASHIKAWA HIROYUKI)

静岡県立大学・国際関係学部・講師

研究者番号：90468877

研究分野：西洋中世史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋中世史、中世教会史、ビザンツ帝国、ギリシャ正教会

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、ビザンツ帝国において進展した教会と修道院の改革運動の特質を、とりわけ帝国の政治・社会状況および修道士の生活環境との関連において解明し、11世紀以降、西ヨーロッパ・カトリック世界で進展した教会改革、いわゆるグレゴリウス改革との比較を試みることである。本研究では、ビザンツにおいて教会・修道院の改革運動が本格的に開始された11世紀から、帝国が滅亡する1453年までの約4世紀を以下のように区分し、それぞれの時期について、記述史料の分析と現地での地誌調査（おもにトルコ共和国内の都市・遺跡）の両面から、改革運動の要因、構造、後代への影響を明らかにする。

(1) 初期：11世紀から12世紀末まで

成文規則（ティピコン）の導入による修道生活の再編と俗人に対する修道院貸与慣行の改革について

(2) 中期：13世紀初めから14世紀初めまで

総主教アタナシオスの改革と彼の広範な改革を可能ならしめた政治的背景について

(3) 末期：14世紀初めから帝国滅亡まで

正教の神秘主義霊性ヘシカズムの興隆とヘシカズムを実践する修道士（ヘシカスト）の教会組織と帝国の政治と社会へのかかわりについて

2. 研究の進捗状況

(1)

2009年度および2010年度に、改革運動に帝国内の主要な修道院や著名な修道士が及ぼした影響の範囲を記述史料の分析および実地調査にもとづき明らかにするよう試みた。11世紀に本格化した修道院改革の中心地の一つは、地中海東方、シリア・パレスティ

ナ一带の修道院にあった。2009年度には、アンティオキア北部の山岳地帯（黒山）で活動した、黒山のニコンと呼ばれる修道士に着目し、彼が弟子のために執筆・編纂したギリシャ語著述がスラヴ語訳され、ロシア北方まで伝播したプロセスおよび要因を考察した。2010年度には、イコノクラスム終結後から十字軍時代まで、一定数の修道士がコンスタンティノーブルと地中海東方地域を往来したこと、そして、その移動と通信、写本の授受によって修道生活の成文規則が帝国内の各地の修道院に伝播したことを記述史料にもとづいて確認した。

(2)

2008年度に、13世紀から14世紀にかけてビザンツ教会で進展した改革の特徴を把握するべく、その主要な担い手であった総主教アタナシオスの事績および書簡の執筆・使用・保存の問題と、13世紀後半までに、アタナシオスを含む厳格主義的な修道士層に広く共有されるにいたった政治思想を集中的に検討した。13世紀後半に一部の修道士らに広まったのは、正教会とローマ教会の合同への反対意見を表明する際に、ラテン人（＝カトリックの西欧人）を異端者であると公言することと、魂の身体に対する優越という、古代ギリシャ哲学に由来するレトリックを使用することであり、これは、後に合同支持派に転向する高位聖職者ヨアンニス・ベッコスの1273年の否定的発言に由来することを明らかにした。

(3)

2010年度には、13世紀以降、ビザンツ・正教スラヴ世界で普及した神秘主義霊性、ヘシカズムについての政治・社会史的考察を開始し、その成果の一部を「聖山アトスの静寂

—総主教アタナシオスとビザンティン・ヘシカズムの接点」と題する論文にまとめた(2011年刊行予定)。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
(理由)

本研究はビザンツの教会・修道院の改革についての体系的な理解を目指しており、とりわけ11世紀から15世紀にかけての改革運動を記述史料の分析と実地調査(おもに地誌調査)にもとづいて明らかにすることに主眼を置く。記述史料については、研究課題(2)に関連するアタナシオスの書簡群とそれを収録した書簡集の写本を、また、(1)に関連する黒山のニコンの著述を考察し、一定の成果を論文および口頭発表の形で公表できた。一方、トルコ共和国の都市・遺跡を主対象とする地誌調査も、2008年度以降、毎年実施しており、目下、収集したデータの分析と発表の準備を行っている。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度である2011年度の目標は、これまで行った個別の研究の精度を高めると同時に、包括的な研究成果を具体化させることである。当年度は、ビザンツ教会の聖職者および修道士の生活と彼らの帝国政治への関与・影響がアタナシオスの時代にかけてどのように変遷し、アタナシオスの時代以降、崩壊が加速度的に進む帝国社会においてどのような局面を迎えたのかという問題を、これまでに収集した記述史料とトルコ共和国の各地で実施した調査結果の再検討を通じて明らかにするよう試みる。それと同時に、ビザンツ世界の修道士の移動と交流の様態についてより明確な知識を得るべく、キプロス島(キプロス共和国および北キプロス・トルコ共和国)、イスラエル共和国、エジプト共和国に現存する正教修道院(エルサレムの聖サバス修道院、シナイ山の聖カタリナ修道院など)において、地誌および写本の調査を行う予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

- ① 橋川裕之、「魂を脅かす平和——ビザンツの正教信仰とリオン教会合同」、『洛北史学』、10号、1-28頁、2008年、査読有り
- ② 橋川裕之、「コンスタンティノーブルの奇跡——総主教アタナシオスに注目して」、『アジア遊学』、115号、66-75頁、2008年、査読無し
- ③ 橋川裕之、「声を救う——アタナシオス

書簡集の起源について」、『早稲田大学高等研究所紀要』、創刊号、5-41頁、2009年、査読有り

- ④ 橋川裕之、「アルセニオス派のシスマ終結の背景について」、『プロジェクト研究』、4号、69-83頁、2009年、査読有り
- ⑤ 橋川裕之、「総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡——マノリス・パテダキスの新説を吟味する」、『オリエント』、51巻2号、116-139頁、2009年、査読有り
- ⑥ 橋川裕之、「アーカイヴとしてのコーラ——総主教アタナシオス書簡集(Codex Vaticanus Graecus 2219)の場を求めて」、『早稲田大学高等研究所紀要』、3号、35-56頁、2011年、査読有り

[学会発表](計4件)

- ① 橋川裕之、「ラテン人への憎悪を超える——ベッコス¹⁾の転向について」、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月13日、京都大学
- ② 橋川裕之、「シリアからロシアへ——黒山のニコンの著述の航跡」、シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築——ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」、2009年11月1日、北海道大学スラブ研究センター
- ③ 橋川裕之、「コンスタンティノーブルのストゥディオス修道院とスラヴ人修道士」、USフォーラム2010、2010年8月3日、静岡県立大学
- ④ 橋川裕之、「パラマスとバルラームの対話——14世紀ビザンツの平和思想」、日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月4日、東洋大学

[図書](計3件)

- ① (共著) 橋川裕之、「ビザンツ帝国を救うべき新法——総主教アタナシオスのネアラについて」、慈学社出版、『法の流通——法制史学会60周年記念若手論文集』、2009年、467-499頁
- ② (共著) 橋川裕之、「学びの果て——ビザンティン哲学者の自伝と自負」、成文堂、『ヨーロッパ・エリート支配と政治文化』、2010年、297-321頁
- ③ (共著) 橋川裕之、「シリアからロシアへ——黒山のニコンの著述の航跡」、私家版報告書、『北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」報告書』、2010年、265-286頁